

堀のコンビである。今西は探検への情熱、ねばり強い性格、企画力のある直観主義をもち、リーダー格、西堀は着実な実行力、器用さ、実証主義を備え、サブリーダー格。また、ヒマラヤ熱の火つけ役でもあり、極地法、ヒマラヤ全般についても熱心に研究をしていた伊藤が高級参謀格であった。伊藤の卒業のちは加藤泰安がこれにかわった。話は少しさかのぼるが1929年、兵役から帰った今西は、細野、伊藤らとともに、ヒマラヤの氷は日本では富士山しかない、富士山で氷雪技術のトレーニングをおこなった。(そのとき一行に同行したドイツ人によってこの記録はDie Alpenに掲載された。)カプルー計画の出来た昭和5年12月から翌年の1月にかけて、その訓練の目的で、今西、西堀、酒戸、浅井、伊藤、工楽らは、日本ではじめての極地法による登山を富士山で行った。この極地法という言葉は、伊藤が「アサヒスポーツ」に投稿した記事の中にはじめて、Polar methodを訳して使ったのである。極地法の実験、高山病の経験、高所での雪洞の研究など、日本で最初の試みが行われた。

昭和7年5月にはヨーロッパアルプスで技術をみがいた高橋らが帰国。第1次ヒマラヤ計画はつぶれたとはいえ、着々と研究はつんでいった。ヒマラヤ目ざして燃えたったエネルギーは昭和9年の12月から翌年の1月にかけて行なった白頭山遠征で発散する。隊長今西以下、西堀、高橋、宮崎、奥、伊藤、旅行部の学生ら15名。日本内地にすでになくなった処女峯を外地に求め、高さこそ低いが、極地法を試みるのにかっこうの山である登山距離の実に長い、白頭山がえらばれたのである。彼らはここで、もし当時ヒマラヤ遠征が実現していたら実行したに違いないいろいろの試みをしている。ポーターテント、寝袋等の装備の研究、空地無線連絡、シェルバか日本のガイドかの比較等々である。

この朝鮮最高峰(2,744m)の白頭山冬季初登頂が日本登山史上に占める位置は非常に大きい。それはこの遠征を歴史の中においてみたときによくわかると思う。内においてはAACKにとって最初の海外遠征であり、京大旅行部や三高山岳部の学生を刺戟し、外においては海外遠征の流行するきっかけを作った。

その1つのあらわれが翌年の加藤泰安隊長の中部大興安嶺冬期遠征である。これは吉井ら旅行部現役7名からなり、冬の中部大興安嶺の最高峰(1,800m)に初登頂した。あくまでも現役のみで組織し、先輩から平吉功をリーダーに推せんしたが加藤がそれを断ったという話も伝わっている。

彼らは1月2日馬ぞり15台をつらねてハルピンをたつたが、その後1週間、とんでもない誤報が内地の新聞、ニュースで伝えられた。全隊員がホロンバイルの草原で凍死したというのである。家族、大学の心労は

ひととおりでなく、ハイラルからは捜索自動車隊も出る始末。結局、誤報はモンゴル人の凍死体をまちがえたということがわかり、彼らは捜索隊に会ったがそのまま前進をつづけた。彼らはこの冬季登山で零下48度という寒さを体験し、貴重な経験を積んで帰った。

× × × ×

こうした度重なる遠征によって装備や食糧の研究もすすみ、機運は熟してきた。ヒマラヤ遠征はAACKの最初からの目標であった。

昭和11年3月、今西は東満州から北支へまわり、当時北京にいた伊藤に会い、ヒマラヤ遠征を打診、そのために彼に帰国を要請した。帰国した伊藤をむかえて4月、AACKの総会が京都平八茶屋で行われた。加藤泰安、児島勘次らの推進によってAACK第2次ヒマラヤ遠征が企画された。目標は世界第2の高峯K2(8,611m)、時期は翌年の1937年、リーダー木原均スポンサー朝日新聞社と決定。当時K2は1909年イタリアのアブルツジ隊が試登してから30年近く、だれも近づこうとしなかった山である。意気はまことに壮んであった。

田中喜左衛門と奥貞雄の2人が費用を出して、伊藤は許可とりつけのためインドへ飛ぶ。交渉は成功し、伊藤はカラコラムに入る内諾を得、ヒマラヤンジャーナルにも日本隊カラコラムに来るとのニュースが掲載された。しかしどうしたことかK2遠征の許可はハウストンのアメリカ隊におりてしまった。たとえ許可が来ても戦局が遠征を許さなかったであろう。昭和12年には支那事変が始まった。

立教のナンダコット隊は戦争の間隙をぬって成功した、日本の戦前での唯一のヒマラヤ遠征隊であった。この隊の成功がAACKの会員たちを切歯扼腕させたのは云うまでもない。しかし戦局は日に日に激しくなり、AACKのヒマラヤの夢は戦後まで持ちこされるのである。

カプルー計画のエネルギーが白頭山に向けられたように、第2次ヒマラヤ計画のエネルギーは大陸へ、そして中央アジアへとむけられていった。

#### それから敗戦まで

戦争はヒマラヤへの夢を破った。AACKはそのホコ先を大陸へ転じた。大陸からのヒマラヤ行きを考えていたのである。

昭和12年夏、加藤は単身ホロンバイルから内モンゴリアにはいった。あこがれの中央アジアの一角に立って、エーデルワイスの咲く土を握ってポロポロと涙をこぼしたという話はあまりにも有名である。ついで翌年木原均を隊長に今西、加藤、宮崎ら13人からなるAACK内モンゴリア学術調査隊は昭和13年8月から約1ヶ月間内モンゴリア一帯をトラックでまわった。鈴

木信を隊長とする旅行部現役からなる学生班も組織され、これは学術班よりも小範囲を回った。今西寿雄もこれに参加している。

AACKは、この内モンゴリア調査隊を最後に全くの不活動状態のまま終戦をむかえるのである。それは戦局が激化してきたためである。しかし、14年の1月に誕生した京都探検地理学会が、AACKにとってかわって大陸で活躍をはじめたのもAACKが衰えた1つの原因でもあろう。何故AACKが衰えて探検地理学会が生れたか、歴史の流れの中にこのことを分析すると話はおもしろくなるが又別の機会にゆずる。

昭和15年は東京オリンピックの年と決定されていた13年に卒業して当時日本航空の社員であった加藤泰安は中央アジアを横断して、すなわちシルクロードを通してオリンピックの聖火を運ぶという雄大な計画をたて、会社にたきつけた。計画はとり入れられ、ドイツ航空会社ルフトハンザとタイアップしてパミール高原から西を受け持つことになり、その予備調査までしたが、これも戦争のためにつぶれてしまった。

そのあとAACKとしてイランのデマベンド山(5,670m)の登山および学術探検を企画し、隊長は木原均に内定したが、計画だけで実現には至らなかった。

× × × ×

昭和15年ごろから三高の梅棹、川喜田、藤田等が活躍してくる。昭和16年(1941年)の1月、探検地理学会を主体として、藤本、今西(寿)、梅棹らが、カラフトに犬ぞりを走らせ、超短波無線機のテストを行なった。このとき、梅棹はまだ三高生である。9月、京大に入学した梅棹、藤田、川喜田らは、今西をたきつけ、ボナベ島へ出かけた。学生の海外渡航禁止令である1年前、太平洋戦争のはじまるわずか3ヶ月前であった。このとき今西から直接、探検の手ほどきをうけたこの「今西親衛隊」が原動力となり、今西以下13人が昭和17年の5月から7月にかけて北部大興安嶺の探検を行なった。

ボナベ島は探検地理学会によるものであり、北部大興安嶺は国防科学研究所の後援により行なわれたものでいずれもAACKの遠征ではない。AACKは前にも述べたように開店休業の状態であった。

しかし店は休業でも店員は休んでいなかった。この大陸時代の遠征の積み重ねがあつてはじめて戦後の活躍ができるのである。探検地理学会は敗戦で解散したが、それは自然誌学会にうけつがれ、ついで生物誌研究会ができてAACKとも密接な関係をもつようになる。

戦後AACKの再建が行われる話はまた稿を改めて次号に書こう。

× × × ×

以上、AACK結成から敗戦までを簡単にふりかえ

った。実際にAACKとして遠征した記録は、戦前では1935年の白頭山と1933年の内モンゴリアしかない。ヒマラヤ遠征計画を具体化すること2回、ともに実現するには至らなかった。この記録はAACK30年史を書くときに少しさびしいような気もする。しかしAACKが日本における登山と探検の世界をリードしてきたことは、AACK会員の活動で知ることができる。その意味で別表に示したAACKとしての活動、会員の活動の欄を参考までにみていただきたい。

—その2終り—

(いまAACK会員の足跡をヒマラヤ、中央アジアを中心とした世界地図の上で明らかにしようとしています。この地図が完成すれば如何にAACK会員が日本、いや世界の探検、登山界に貢献しているかが明らかになると思います。できれば次号にこれを掲載したいと思いますので、会員諸氏の外地遠征の記録を地図とともにお送り下されば幸甚と存じます。御協力をお願い申しあげる次第です。)

## インドラサン遠征について

酒井敏明

京都大学山岳部は1962年秋、部創設以来はじめての海外遠征登山隊を送り、インドのパンジャブ・ヒマラヤのインドラサン峯(6,021m)初登頂に成功した。この遠征に参加した者の1人として、ここにその概要を報告することができるのは、私のもっとも喜びとするところである。ご後援を惜しまなかった会員各位に紙上を借りて深く感謝の意を表する。

#### 計画が軌道にのるまで

京都大学山岳部が海外遠征したのは決して歴史の新しいことではないが、いずれも計画は具体化せず、ついにながく日の目を見ずに終っていた。4年間という大学の在籍期間が定まっておき、毎年新しい部員を迎え入れ、これをトレーニングしつつ活発な登山活動を行なう宿命にある以上、国内の山を立派に登ることが精いっぱいであり、力の揃った上級生だけで海外の山に向かう余裕がない。部として海外遠征をとりあげるべきではないという考えが支配的であった。ところがこの数年部員の数が急速に増し、意欲的な山行を数多く続けてきて、実力が蓄えられたと判断したのである。部全体として、海外に遠征登山隊を送るべきであ

るという気運が高まってきた。

隊員4, 5名, アプローチが容易で, かつ登頂の見込みがある7,000m前後の山という条件で選ばれたのが, インドのパンジャブ州, ビル・パンジャール山群の6,500m級2座であり, 1962年1月にアプリケーションを提出した。4月になって許可できぬと回答があったため, インドラサンとデオ・ティバ(6,001m)の2座に変更, 7月になって許可を得た。

隊の構成については, 山岳部に腹案があり, 大先輩の方々にいろいろお骨折り願ったが, ちょうどサルトロ・カンリ隊と同時であったので, 難航したといえそうである。一時は私に責任が委ねられ, もちろん固辞したが, 周囲の状況が命ずるままに努力を重ねた。結局資金および渡航の2つの難関は突破することができず, ついにかぶとを脱いでしまう。今西会長, 桑原前会長, 多田山岳部長, 四手井前山岳部長のお骨折りがあって, 隊長は小野寺教授の出馬が決まり, 遠征計画は実現することができた。

隊員は山岳部が選考, 推薦した5名が決定され, 私はノジャック遠征の経験を買われてか, トランスポート・オフィサー役で参加することになる。

京都大学山岳部パンジャブ・ヒマラヤ遠征隊(KUPE 1962)の構成は次の通り。

隊長	小野寺幸之進	51才	農学部教授
副隊長	酒井敏明	29才	大学院文学研究科博士 課程1回生
隊員	大森義次	22才	文学部4回生
〃	田中二郎	21才	理学部4回生
〃	富田幸次郎	22才	工学部4回生
〃	宮木清雅	21才	法学部4回生
〃	岩瀬時郎	21才	経済学部3回生

経費は総額約340万円と見込まれた。山岳部OBやAAACK会員有志に寄附をお願いし, 多額のご援助をいただくことができた。隊員負担金, 山岳部員のカンパそれに会社や個人からの援助を得て, 先発の4名が神戸を出発することができたのは, 1962年8月6日である。

#### ア プ ロ ー チ

宮木と私は8月13日横浜を出帆, 香港から空路カルカッタに向かい, 19日到着。船の大森, 田中, 富田, 岩瀬の4人は29日にカルカッタに入港, 船荷通関の都合で, 31日と9月2日の2隊に分かれ, 汽車でバタンコットに行く。バタンコットからは, ベアス川源流のクルー地方の主邑クルーまで, バスで12時間, 約100kgの荷物と共に後発が到着したのは9月7日である。

ダーズリンから呼んだシェルパのダワ・トンドゥップ, ラクパ・ツェリン, グンディンのシェルパ3人, それにクルーに着いてから備うことにしたラダキのワ

ムギヤル, スパルグンの2人を加える。

インドラサンとデオ・ティバの両峯の間から流れだすマラナ氷河にとりつくため, マラナ谷をさかのぼる予定であった。クルーから7, 8マイル下流で, 東からベアス川の支流パルバティ川が合流している。ブンタールという村があり, ベアス川沿いの草地にクルー飛行場がある。ブンタールからパルバティ川左岸の道を11マイル行くと, 北からマラナ川が合流している。ジャリという村がある。

さてキャラバンだが, ブンタールからジャリまではブンタールのレインジ・オフィスの紹介でラバをやとうことにした。ジャリからマラナ氷河末端まで約40km, 途中にただ一つ, マラナ村という孤立的な山村があるが, パルバティ谷の村々との交際が少なく, その村人を備うにしてもだいぶ厄介らしい。

炎熱のインド平原からバスでクルーへやってきたところまでは調子が良かったが, 標高約1,200mのクルーから先は, モンスーン名残りの雨にふるえながら, 集まらぬポータに前途が思いやられた。隊長はデリーから空路到着する筈だったが雨で飛行機がキャンセルになったので, ブンタールに田中とグンディンを残し大森と宮木はラダキを連れて9月8日ジャリへ先発, 富田, 岩瀬, 酒井はダワ, ラクパとともに, ラバ19頭のキャラバンを編成して, 10日, ブンタールからジャリに進んだ。先発の2人が心もとないヒンディーで集めた情報では(英語のわかる村人はいない), われわれが必要とする40人ほどのポータは集まらず, 10~20人しかいないという。やむなく隊を分け, 手に入るかぎりのポータで進むことにする。谷のゴルジュの底につけられた悪路をたどってマラナ村へ着く。この村内だけに通用する言葉というのだから, 英語のあまりわからぬダワを仲介してのわれわれと村人との交渉はかなりの困難であったが, ともかく, この谷を上へのぼる以上マラナ村の人間をポータに使わないと駄目だという。賃金は1人1日7ルピー, 氷河の末端まで2日行程だと主張する。偵察のため登った日はあいにく降ったりやんだりの天気だ。約2,700mの村から上はかなりの開けた谷になっており, 牛や羊を放牧するアルプがあるためか, 踏みあとはずっとついている。持参した地図は小縮尺なためわしいところはわからないが, マラナ谷が大きく右へ曲がる付近, 約3,500mまで登った。マラナ氷河を見ることはできなかったが, 左岸の稜線の上には雪が残っているのがわかりさすがに山に近づいたと思う。マラナ村へ帰り, ジャリから荷物があがり次第, 村人を備って輸送を始めることにした。

9月14日, 大森, 岩瀬, ダワが16人のポータを率いてマラナ村を出発, 明るる15日, 富田, 宮木, ラクパは14人を連れてあとを追う。隊長は鉄道とバスに乗り

かえてクルーに着き, 田中, グンディンと合流してジャリへあがってきたので, 連絡のためおりた私も加わって, 6人のポータを連れたしんがりパーティは15日ジャリを出発, マラナ, マタギランの泊り場を経て, 17日にベース・キャンプに到着した。連日雨が降る。モミヤヒノキの林をくぐり, 高山植物のかわいい花を踏みながらも, 頭上を厚い雨雲におさえつけられ, 目指す山の姿を見ることもできぬ旅であった。

#### ア イ ス ・ フ ォ ー ル

ベース・キャンプはマラナ氷河の末端から約3km手前, 右岸の段丘の上, 草地に設けられた。高度約3,800m。氷河のツングはツルツルのゴルジュの間を割って流れ落ち, 下の川原から氷河にとりつくことはできぬ。比高300mほどの段丘上のキャンプから, 草つきの斜面をトラバース, 右岸のゴルジュの上でできたせまい岩棚をつたって行くと, 氷河の右岸のモレインの上に達することができる。そのすぐ前に, 左手はるか上方の山腹の岩壁の一部がくずれつつあるところがあって, とときどき大音響とともに岩塊がなだれのように落ちてくる危険な箇所を, 横断せねばならない。

氷河は薄よごれた氷の層を見せ, 黒い粘板岩でできた岩層が, 二筋のモレインをつくっている。ツングから東へ氷河を登って行くと, 約1kmほどで, 本流は左へ, すなわち北へ, ほぼ直角に折れている。右からは, アリ・ラトニ・ティバ峯(5,490m)の裏側から流れ出す枝氷河が流れこんでいる。T字型の交叉点をなしているわけである。左へまがると, マラナ氷河の全貌が, 痛いほど視界の中にとびこんでくる。幅2kmほどの氷の帯が大小のクレバスを縦横にはりめぐらせながら, ほとんど勾配もなく北へのび, 約8kmほどでつきるあたりが, まっ白な屏風を立ちめぐるようになっていく。アイス・フォールだ。比高約800mあることは後になってからわかった。はじめて見たときには, 遠くから眺めたことでもあり, せいぜい500mくらいかと思ってしまう。

マラナ氷河の右岸はおおまかな岩壁がつづいていてその上のネベ(雪原)からたれさがっているらしい氷の塊が, ところどころ, 岩壁が低くなっているところから, 舌のようにぶらさがっている。左岸はどうかというと, マラナ・ナラの東側にはいりこんでいるトス・ナラ川の水源をなすトス・ナラ氷河との分水嶺山脈が, せまい, ギザギザした岩の稜線をつくって, 視界をかぎっている。アイス・フォールの右手には, やはり岩稜がおりてきて, この分水嶺につながっていると考えられるのだが, もっと接近して観察しないと, わからない。

ところで, インドラサンはどこにあるのか。アイス・フォールの上には, とときどき晴れまのできるモン

ーンも終りに近い雲の間から, なにも見ることはできない。右手の岩稜の一部が突き出たこぶのように見えないではないが, なんぼなんでもあんな岩塔がインドラサンであるとは考えにくい。すこし情ないような気がする。あのアイス・フォールの奥にあって, この位置からでは見ることができないのにちがいないが, 早くインドラサンの姿を見せてもらえないと, どうも頼りない。力のいれどころがわからないのだ。

けれども, それどころでないことが, すぐわかった。アイス・フォールの突破がたいへんな仕事なのであった。ヒマラヤン・ジャーナルの第21巻に写真がのっているインドラサンの上部を, 早くこの眼で見たいと思ったのだが, そして, 写真を見ただけで発見することができなかった頂上へのルートを, 氷と岩の急斜面に自分の眼で見出したいと思ったのだが, アイス・フォールに登路を求めることが簡単にゆかなかったのだ。私がこのアイス・フォールの前に立つ前に, すでに開始されていた偵察隊の活躍を, ここで述べておかねばならない。ベース・キャンプに一番乗りした大森と宮木は, 9月17日, 富田, 岩瀬, ダワ, ワムギヤル, スパルグンの5人のサポートを受けて, マラナ氷河を登り, 約4,300mに仮キャンプをつくった。

次に2人はアイス・フォールのふもとに達し, 偵察した結果, 左岸寄りの第1キャンプ予定地からアイス・フォールを直登することは不可能であり, 右岸寄りにある台地状の雪原に到達したのち, そこからアイス・フォール中段にできている緩傾斜の雪面にとりつき今度は逆に, 右上へ斜めにあがって上端にとりつくというルートを, 有望な, 可能性あるものと考えていた。同日, ベースから隊員, シェルパ, ラダキなど9人で, 仮キャンプまで荷上げをし, 偵察隊の報告をもとに, 9月20日からの登高計画を定めた。

アイス・フォールに登路を発見し, その上端に第2キャンプの位置を決める。第3キャンプは上部雪原上インドラサン本峯のふもとに設ける予定で, 第2キャンプおよび第3キャンプ用の荷物を第2キャンプ予定地まで荷上げするのを, 第1段階とする。第2段階は第2キャンプおよび第3キャンプの建設と, インドラサン, デオ・ティバ両峯の攻撃である。第1キャンプ以上で行動するのは隊員6人とシェルパ2人, ラダキ2人で合計10人, 日数は約4週間を要するであろう。隊員は2人1組で行動し, 随時, シェルパとラダキをつけ加える。

隊長は登頂態勢ができるころに第1キャンプにあがり, それまではクックのラクパ・ツェリンとともにベース・キャンプを固める。隊員とシェルパはあまり長いあいだ連続的に行動せぬようにし, 交代でBCにくだって休養する。ざっとこういうあらっばい行動方針を立てた。

9月20日、酒井、大森、田中、富田の4人が第1キャンプ建設に向かう。宮木、岩瀬、ダワ、グンディン、ラムギャル、スバルグンというフル・メンバーがサポートする。途中から雪が降りだし、予定地までゆかないうちに、大クレバスに進路をはばまれ、大あわてでテントを張る。サポート隊も、湿雪でビショビショに濡れながら、急いでベース・キャンプへおりた。次の日も1日雪が降ったので行動停止。その次の日、昼から雪がやんだので、はじめの仮キャンプ(デポⅠ)のデポから、荷物の一部をあげる。23日、久しぶりに快晴になったので、3晩降りこめられた仮キャンプ(デポⅡ)を撤収し、新雪のラッセルに苦しめられながら、約1km上流、高度約4,500mに第1キャンプをつくる。ベース・キャンプからも6人があがってきた。大森と富田は朝からルート偵察に登ったが、ブレーカブル・クラストに体力の消耗はなほだしく、約4,800mの雪の台地までしかゆけなかった。新雪はおよそ1mほど積もったので、堅雪の上をスタスタと歩いて行けた第1回の偵察とは大ちがひ、行程ははかどらぬ。このあと1週間ほどの間、アイス・フォールとの苦闘が続く。前半は天気が悪かったので、ルート開拓は遅々として進まなかった。大量の雪が降るといことこそなかったが、晴れてアイス・フォールの全貌が見渡せるのは朝のうち半時間くらいだけ、午後はきまったように雪がちらつく。ときには雷鳴を聞く。こんな状態が続いては、偵察隊のトレースがのびず、能率が悪いので、プラトーに仮キャンプ(デポⅢ)をつくり、ここから道探しに出かけることにした。

9月29日、大森と私はアイス・フォールを登る。何日ぶりかの快晴、プラトーのせまいキャンプを出発。アイス・フォールの中段にかかる緩傾斜面への登り口には、前に富田たちがつけたフィックス・ロープがある。このバンドを右上へあがって、アイス・フォールの中心部につく。はじめはあくまで右へバンドをつめて行き、右端近くで上に抜け出るルートを考えていたのだが、大きなセラックスが林立し、深さ10m以上のクレバスがずたずたに斜面を断ち切っている。このルートは駄目だ。まっすぐに上へ登る。アイス・フォールの上部には、巨大なブロックが目押しに立ち並び、壯観をきわめている。三階建てのビルディングくらいあるブロックの側壁は、ツルツルの蒼氷になっており、今にも倒れかからんばかりに、裂け目のはいた不安定なやつが沢山ある。5m以上もあるツララがぶらさがっている。ヒドン・クレバスに用心しながら、アンザインでルートを探して進むうちに、次第に右へ、右へと行ってしまった。大きなビルディングの垂壁が二重、三重に押しかぶさるように並んでいて突破する口がなかなか見つからない。高さにして8割がた登ったが、時間切れで引き返す。マラナ氷河を

見おろすと、大きなしわが右からも左からも流れの中央へ寄せている。プラトーから右手の方を見ると、デオ・ティバからおりてくるウォーターシェッド・リッジの末端は、ほとんどそれと分からぬくらいの目立たない稜線になって、広い雪原を抱いていることが知られる。センチネル・ピークという、デュハンガン・バスからイギリス隊が登った岩峯は、ちょうどベース・キャンプの背後の斜面にそそりたつ山のことなのであろうか。デポⅢを素通りして第1キャンプにおりてみると、ベース・キャンプからあがってきた連中も、到着したところであった。

つづく3日間、登路開拓と荷上げがおこなわれ、どうやら第2キャンプ予定地からインドラサンを観察することができた。大森、宮木たちがアイス・フォールの残された最後の部分を偵察した結果、氷壁を登り、クレバスを渡り、大きなアイス・ブロックのすそをまわりこむと、そこだけ1ヶ所、雪面が続いて上まで登りきるルートが見つかったのである。上部マラナ雪原のいちばん端っこ、前と後の大クレバスの間に細長く島のように残った雪面に登りつくと、正面にインドラサン、左手前にデオ・ティバの二峯が姿をあらわす。この第2キャンプ予定地からでは、すぐ前のクレバスの側壁がじゃまになって、インドラサン本峯の根元は見えないが、両肩をいからして立ちほだかる、その急な斜面はなかなかの迫力をもってせまるものがある。登路があるかどうか、簡単にはわからない。ただ、あるとしても、それが容易なものでないことだけは、はっきりしていた。デオ・ティバの方はドーム状のなだらかな斜面が頂上まで続き、登頂はあまり困難ではないと思われた。

第2キャンプ予定地まで荷上げができたので、全員一度ベースキャンプまでおりて、休養をとる。

#### 困難な岩と氷の壁

10月6日、第2段階にはいる。サポート隊の6人が第1キャンプに進む。7日、富田、宮木、岩瀬、グンディンがアイス・フォールを登って、約5,300mに第2キャンプを建設した。インドラサンの本峯は上部マラナ雪原の北の端にそびえている。デオ・ティバとのコルから頂上へのびる、アレート状の西稜、南から這い上る南稜、これは尾根というよりは、むしろ岩壁という名がふさわしい。この間の南西斜面に登路を求めなければならぬ。

10月8日、インドラサンの本峯のふもと、約5,500mに第3キャンプがつくられた。富田、宮木は登路偵察、約700mの比高をもつ本峯は、大部分が急峻な岩壁でももられているが、部分的にはりついている雪と氷の斜面をつたって行けば、どうやら頂上に達するルートは求められそうである。頂上のスノー・キャップ

のように見える部分から、急な雪面がたれさがっていでちょうどじょうごのように、その下部が細くくびれている。そこから下は急な岩壁をなしてすっぱりと切れ落ちているのだが、途中にある高さ100mくらいの岩場を突破できるならば、右下から這いあがっている雪面を登って、上のじょうごの斜面にとりつけそうである。じょうごの雪面は、まん中が少しオーバーハング気味な氷壁をなしている。直登は不可能だが、右か左の、クローワール状の急斜面をただひたすらに登るならば、スノー・キャップの縁にたどりつくことができるだろう。そこから頂上までは、傾斜のゆるい雪稜がつづいているから問題はない。右下から斜めに這いあがる「下部雪面」と、じょうごの壁をなす「上部雪面」の間にある、くろぐろとした岩場、それはほとんど垂直に近いと思われる岩壁なのだが、ここになんとか道を切り開かなくてはならぬ。それ以外に、このマラナ雪原からインドラサン頂上に登るルートはない。

富田と宮木、宮木と岩瀬の2日間にわたる偵察とルート工作の苦闘をここに簡単にのべることはできないが、かれらの頑張り、この5,800mの高度において困難な岩壁にルートを開拓することに成功した。特にてごわかった約10mの垂直のスラブをはじめ、必要な箇所にはザイルを固定し、上部雪面の末端までは、確実なルートが、確保されたのである。

ただちに第一回サミット・パーティの大森と田中は10月11日、第3キャンプを出発して頂上に向かった。私はダワを連れて昼すぎに第2キャンプに登ったが、そのころ、朝からの快晴はくずれ、小雪さえ舞ってくるという天気になっていた。ひどくアタック隊のことが心配になった。第3キャンプから帰って来ていた富田とグンディンの報告では、12時ごろ、上部雪面の、大きなツララが幾本もぶらさがった、例の氷壁の直下に、2つの黒点が見えたが、その後は雪雲におおわれて、アタック隊の様子は全然わからぬという。夕方になって、第3キャンプの宮木と岩瀬から、2人がまもなく帰ってくるとトランシーブで連絡してきた。

結局、第一次アタックは失敗したのだが、次の日、第3キャンプに集って、アタック隊の報告をもとに相談し合った結果、つづいて第二次アタック隊を出すことにする。

失敗の原因を求めるならば、これは私の責任に帰するのだが、ルート選定が不適當であったことをあげねばなるまい。ツララの氷壁の下まで登ってから、かれらは左のクローワールを登ろうと思い、左へトラバースしかけたのだが、これがとんでもない悪い氷壁であって、ステップ・カッティングにひどく消耗させられたことと、アイス・ピントが不足したために、退却せざるを得なくなったのである。というのは、ツララの

氷壁の下から、左右2本のクローワールのうちどちらのルートが良いか偵察では判断できていなかった。その場で決めるつもりで出かけた。ところが、第3キャンプ付近から見れば明らかに危険のより大きい左へのトラバースが、いざ、その場に着いて見ると良いルートと思われた。氷壁にとりついて、その悪さがわかって、右のクローワールヘルートを変えようとしたときには、すでに疲労の極に達していたということである。

ただし、ツララの氷壁の下から右上へトラバースして、右のクローワールにとりつくといっても、誰もこれまでこの右のクローワールを見てはいないのだ。多分それはあるだろうと考えていただけで、C3付近から見あげるときには、その手前の岩塔(主稜線の左の側壁上の岩の突起で、将棋の駒の形をしている)の後にかくてれ見えないのである。ただ、この岩稜と、背後につきあげていてその上部を見ることができ氷壁の斜面の形および位置から考えて、その間にクローワールが這いのぼっているにちがいないと考えていたのである。これを実際に観察して登路に使えるものであるかどうかを確かめるために、富田、宮木、グンディンの3人を第3キャンプに残し、他の5人でデオ・ティバとのコルまででかける。途中で将棋の駒の裏をよく眺められる場所から、双眼鏡で観察する。右のクローワールは、たしかにあった。傾斜はずいぶんけしそうだし、氷化してテラテラ光っていることがわかったが、確実にルートとして使えると考えられた。ただしこのクローワールの末端にとりつくためには、ツララの氷壁の下まで登ったのではかえってトラバースが困難になりそうだから、フィックス工作終了点から、ただちに右上へのびる細長い外傾した雪面を登って行き、この雪面が側壁に突き当たるころから、左上へトラバースして、クローワールの入口に達するべきであると思われる。この外傾した雪面の登高といい、突き当りの岩と氷のミックスしたところのトラバースといい、決して容易ではなからうが、頂上に達するルートはこれ以外にない。

ルートの見通しが得られたので、10月13日富田と宮木の2人は勇躍頂上に向かった。ピバークは必至と考えられたので、ツェルト、エア・マットレス、ラジウス、コッヒェルなどの露営用装備と2日分の食糧を詰めこんだザックは、ザイル2本、カラビナ6ヶ、アイス・ピストン10ヶ、ロック・ピトン7ヶなどの登山用装備とともに1人当たり約20kgの重量となった。4時20分出発、急傾斜の上部雪面、クローワールへの岩と氷のトラバース、クローワールのアイス・カッティング、いずれも重荷を負いながらの奮闘で、ずいぶん時間がかかったが、二人はよく頑張り、午後4時にスノー・キャップの下端に登りついた。そこに荷物を置

いて頂上に向かい、4時35分、最高点の雪の突起を踏むことができたのである。朝の快晴は曇りから雲にかくされ、頂上では一面のガス。写真を撮って20分後頂上をあとにし、デポの雪面をならしてビバーク。

12日の晩、第2キャンプで私は大森、田中と相談して、13日、インドラサンと同時に別パーティでデオ・ティバをアタックすることに決定した。13日6時に大森と田中は第2キャンプを出発。7時の交信でこのことを第3キャンプの岩瀬とグンディンに伝える。私がトランシーバで岩瀬に話しているうちに、すでに2人が第3キャンプへ近づいてくるのを見たのだから、岩瀬は慌てた。

ともかくこの4人は軽装でデオ・ティバに向かい、シュプールのつけてあったコルからデオ・ティバの東斜面をラッセルしながら登り、途中から右へ折れて北東稜に出た。頂上到着は12時。疲れも見せずに3時には第3キャンプに帰って来た。デオ・ティバは1952年の初登頂のあと、日本の婦人登山隊など、4、5回登頂されている山だ。われわれの第2キャンプまたは第3キャンプからさしたる困難なしに登れると思われたので、インドラサン登頂後片づける積もりであった。

ところが第1次アタックが失敗し、日が延びたためにこのあと天気が続くか危ぶまれたので、多少の無理を承知で同時アタックに踏みきったのである。

その日、岩瀬と私は第3キャンプに残り、大森、田中、ダワ、グンディンは第2キャンプに帰った。昼すぎからインドラサンはガスに包まれて、富田、宮木の2人の姿を望遠鏡で探すことはできなかったが、スノウ・キャップ付近でビバークしていることは疑わなかった。登頂したあとか、あすの登頂を控えてかはわからなかったが。

14日、朝テントをとびだして見ると、頂上付近は雲ひとつなく、最高峰に続くスノウ・キャップの雪面にトレイスがついているのがはっきりとわかる。さっそくトランシーバで第2キャンプに連絡し、第1キャンプの隊長に報告してもらおう。第2キャンプからあがって来た連中といっしょに見守るうちに、8時ころから動きだした富田と宮木がゆっくりとおりてくる。昼には着くかと思ったが、しんちょうに確保しながら、ときにはアップザイレンを使って下降するのにずいぶん時間がかかり、下部雪面のとりつき点まで迎えに行った3人といっしょに第3キャンプに帰着したのは3時半である。

ひどいアルバイトだった。高距約700mに登り10時間15分、くだり7時間15分を要したことになる。ほんとうによく登ってくれた。岩壁といい、氷壁といい、どこといって気を許すことができない困難な登攀を、頑張ってくれようおおせてくれたものだ。これで目的を達することはできた。

10月15日第3、第2の両キャンプを撤収して第1キャンプへくだり、16日第1キャンプを撤収して、ベース・キャンプへおりた。マラナ村からポータを呼びあげるひまを利用して、祝いの宴を張り、また休養と荷物の整理をする。京都の留守本部やデリーの大使館に電報や通信を送る。

10月19日ベース・キャンプをあとにし、ジャリ、クルーを経由、10月30日、デリーで隊を解散した。ネパールや南インドに立ち寄るものもあり、11月から12月にかけて帰国した。

× × × ×

以上簡単にインドラサン遠征について、個人的な覚え書きを記した。すでに別の形で報告書が出版されているし、京大山岳部の「報告」にも詳細な記録が発表されている。参照していただければ幸いである。

幸いにしてインドラサンの初登頂に成功することができ、この幸運な遠征に参加できたことがなにより喜ばしい。京大山岳部ではすでに第2の遠征計画を進めているようであるが、将来の活動のためのスプリング・ボードになり得るとすれば、困難な登攀にファイトを燃やした若い隊員たちの労苦は最大の酬いをうけたことになるであろう。それにしても、留守本部をはじめ準備に奔走してくれたすべての山岳部員に対しては別の機会にゆずるが、後輩のために有形、無形の援助を与えられた会員各位にお礼を申しあげなくては、本稿の意味はなくなるのである。とくに工楽英司、松田寿郎の両氏には対官庁交渉に関して強力なご援助をいただき、加藤泰安、今西寿雄の両氏からは登山の戦略戦術に関する貴重なアドバイスを得た。四手井綱英、吉井良三、鈴木信、中尾佐助、川喜田二郎、近藤良夫、山口克の各氏およびサルトロ・カンリ遠征隊員の皆様からは募金から準備万端にわたるお世話を受けた。感謝をもってここに記すことをお許しいただきたい。

## 木曜講座 —その3—

### カラコラムに残された問題

上尾庄一郎 羽根田博正 安原啓示

この講座は毎週木曜日夜AACKルームに集まる若手の木曜会で行われた講義に若干手を加えたものである。

#### K-12

サルトロカンリに続く1964年度AACKの海外遠征の対象の山としてK-12（不許可の場合はガッシュブルムⅢ）が選ばれ、多田政忠教授を隊長、舟橋明賢氏を副隊長とする遠征計画が具体化し、活動を始めた事はすでに昨年春の1962年度AACK事業報告にてお知らせしたが、残念ながら昨年の暮もおしつまってから、パキスタン外務省より日本外務省を通じ1964年度にはK-12・ガッシュブルムⅢいずれの山にも許可不可能の旨通知が入った。それ故本年度は我々はカラコラム遠征をあきらめなければならなくなった。

種々の情報によればガッシュブルムⅢは中共、パキスタンの国境協定により、ここ1、2年はいかなる国の遠征隊も近づけないとのことで、この山は今しばらくは未登のままで残るのであるが、K-12は我々以外のどこかの隊に許可されるらしいとの事である。（K-12にはAACK以外ドイツのパバリア隊、英国隊東京隊が申請しているという）しかしその隊が本年度登頂をくわだてたとしても必ず登れるとはかぎらないから、1965年度にはAACKの遠征の対象として返り咲くかもしれない。

#### K-12の概念

サルトロカンリの南東方約15kmにあり、シアチェン氷河とピラフォンダ氷河にはさまれる流域の最高峰である。

標高24,503feet (7,428m) 又は7,463m

北緯35°18' 東経77°1'

そのドッシリと重量感にあふれる巨大な山容は、今や残り少ないカラコラムの未登峰のうちでも上位にランクされる立派なものである。又6月の終りになればBCにも草花が咲き、BCから一日行程で緑の牧場（ギャリ）に出られ2、3時間で野生のネギや薪のとれる所に行けるというのも、カラコラムの山ではめずらし

いことといえよう。

K-12周辺の地形は未だ未調査の部分が多く、特に南部はクォーター・インチ・マップにも空白のままに残されている。又東部の氷河の様子も地図と実際とは大きな相異がある事は、すでに1957年のシプトン隊により指摘されている。1960年のスティーヴンソン隊はK-12登山の外にK-12周辺の地理学的調査も相当行ったようであり、ヒマラヤン・ジャーナルVol. 23 (1961) に発表されたK-12周辺概念図がこのあたりの正しい地形を示す唯一のものである。これを見るとクォーター・インチ・マップでは記入されていないK-12東面からシアチェン氷河に直接流れ込む二つの大きな氷河（K-12氷河とその下流の無名氷河）が記されており、このあたりではクォーター・インチ・マップがいかに不正確かがわかる。

文献上に発表されているK-12の写真としては、東北方面から見たものとしてはワークマン夫妻の“Two summers in the ice wilds of the eastern Karakoram.”あるいはジェオグラフィカル・ジャーナルVol. 43 (1914) 276-7. にあるジャンクジョン・ピーク（シアチェン氷河とテラムシェール氷河出合左岸の小ピーク）頂上からのパノラマ写真。

西北方向からはAACKの“サルトロカンリ”写真ページ42, 46, 69. 西方からはヒマラヤン・ジャーナルのVol. 23 (1961) 72-79がある。

#### 登山小史

この山を対象にした登山隊は今迄に二隊ある。1つは先にも述べた1957年シプトンの率いるインベリアル・カレッヂ隊で、初めサルトロカンリを目標としていたがスエズ動乱で入山が遅れ、やむなくサルトロカンリは放棄し、代りに彼らがK-12東部に発見し命名したK-12氷河の調査を行っている。この時K-12氷河の源頭のK-12の北側に通過可能な峠を発見しインベリアル・コルと命名した。又帰途、ピラフォンダ氷河の支流ロホモンバ氷河（Rachmo Lungba）から